

## 私の「風景」

伊藤文美 / いとう・あやみ  
三里塚ワンバック野菜農産加工担当

本 日の私。朝、ふきのとうがもうそろそろ出ているかな？ と思いたって見に行く（まだ出ていなかった、残念！）。その後はずっと畑仕事。ジャガイモを植えて、たまねぎを定植、紅葉苔（葉の花の一種）を収穫して袋詰め。そこまで日が暮れてしまった。本当はニラの定植と水菜の種まきもやりたかったのに……。

私が手伝っている畑は現在、10センチほどに成長した小麦が大部分を占めている。豆板醬用のソラマメも順調に育っている。いま収穫できる旬の野菜は、菜の花、小松菜、ホウレンソウ。作業小屋の脇にある梅の木が、いっせいに花を咲かせて、いい香りが漂っている。3・11前はこれで梅干しを漬けていたのだが、セシウムが検出されたため、お休み中だ。

2年前の国際有機農業映画祭に参加し、福島の農家さんの講演で「農業はただ作物を作っているだけではない。地域の風景をも作っているんだ」という言葉がずっと私の心の中に響き続けている。それ以降、「風景」が私のテーマだ。最近、近所の落花生生産者たちの

勉強会があり、出席したところ、「ぼっち積みは時代遅れ。収穫した落花生をビニールハウスで乾燥させれば、すぐに乾いて初物がいち早く出せる」という話を聞いた。落花生は土から掘ったあと、高く積み上げ2メートルくらい高い山にしてゆっくりと乾燥させる。それを「ぼっち」という。10月の落花生の収穫時期には、落花生の畑にぼっちがいくつも並ぶ。私はこの風景がとても好きなのだ。早く初物を出したい気持ちもあるけれど、ぼっちの風景がなくなるのは寂しい。近代化や効率化の流れで、さまざまな風景がこれからも変わっていくのだろう。

畑に夕日が沈むとき、夕焼けに染まった空を着陸直前の飛行機が横切っていく。いつもうるさい飛行機が、このときだけキレイに見える。私の好きな風景となっている。かつて成田空港建設に反対していた私のボスも「キレイだね」と言う。時代と共に変わっていく風景、私はこの地域で「農」に携わりながら、どんな風景を作っていくのか、自問自答が続く。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

## CONTENTS ■ HALINA 24 2014.05.01

- 02 Relay Essay ポコポコ 24 私の「風景」◎伊藤文美
- 03 **【特集】協同組合が創るエネルギーと地域おこし**  
—— 原発廃止を決めたドイツを訪ねて  
再生エネルギーが地域を変えた◎吉澤真満子  
農家が創り出す自然エネルギー—— 新たな地域おこしが見えてきた◎近藤 恵
- 08 **【Topics】**  
海外からの委託業務ブームに揺れるフィリピン◎堀 芳枝
- 10 **【Column】**  
Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記◎ 女が輝く、社会が変わる◎津留 歴子  
マイストーリー in ジャパン 24 【イタリア】コッツォリーノ・アンジェロさん  
微笑みの国から◎ 微笑みを求めて◎平河 夏  
アジア現代文学あれこれ◎ 『東北タイの子』◎大野和興
- 12 撮っておきアジア 24 ブータン◎近藤康男
- 13 APLA 食堂 4 茶葉をまるごと使った簡単レシピ◎赤石優衣、大久保ふみ、廣瀬康代
- 14 **【Voice from APLA partners】**  
【東ティモールより】オレンジワインづくり2年目を終えて  
【ネグロスより】ヨランダ台風支援報告
- 15 事務局だより

## 表紙のことば

ラオスの50年くらい前のパービアンの一部です。「パー」は布、「ビアン」は肩という意味で、肩から胸に巻くように着けます。お寺に行くときや儀式などの正装になります。

この絹織物は、ラオス東北部サムヌア地方の織物で、垂直縞織という仕掛けをもつラオス独特の機織り機で織られています。平織を織り進めながら、柄の部分だけ別の色糸を足すように織ってゆく縫取織の技法で織られています。

すべての色が自然から得られていて、鮮やかで濃い色に染められた艶のある色糸で時間をかけて織細に織られた織物は、織った女性の明るさ、勤勉さ、美しいものを求める心をまさに表現しています。

今ラオスの首都ビエンチャンでは年ごとに車が増え、街中には短パンの女性も現れ、服装は西洋化の一途。この素晴らしいラオスの織物が変わらず作り続けられるようにと願わずにはいられません。

(大藪明恵)

## 特集

# 協同組合が創る エネルギーと地域おこし 原発廃止を決めたドイツを訪ねて

東日本大震災から3年。3・11は世界中に大きな衝撃をもたらした。なかでも、福島原発事故から4カ月後の2011年7月、ドイツのメルケル首相は、世界に先駆けて原子力法を改正し、2022年までの原発完全廃止を決定した。さらにドイツでは、再生可能エネルギーへの転換が様々なレベルで推し進められている。

APLAは、3・11以来、福島県・二本松有機農業研究会のメンバーと活動をもとにすることして、農業を活用した自然エネルギー創出の可能性について模索してきた。ドイツの現場をぜひ見てみたい、という声があり、農業の適正技術を実践するBMW技術協会とAPLAの共同呼びかけで、「ドイツのエネルギー転換と有機農業を学ぶツアー」を実施した。

2014年2月2日〜8日、二本松有機農業研究会の仲間4人、BMW技術協会メンバーの生産者8人、愛媛県の柑橘生産者、研究者・学生など総勢21人がドイツに旅立った。(編集部)

## 再生エネルギーが地域を変えた

吉澤真満子 / よしざわ・まみこ  
APLA 事務局長

ツアー最初の訪問先は、ドイツ最大のバイエルン州にあるグントレミンゲン原発。高速道路を下りて、車窓からのどかな農村風景を楽しんでいると、突如原発が姿を現す。一番近くの集落は数キロ

メートルくらいしか離れていない。冷却水の水蒸気がモクモク出ており、地域住民は否応なくその存在感を感じるだろう。2021年には3つある原子炉すべてが操業停止となる。ビジターセンターの案

内係に、原発が停止することや地域住民の職の確保などについて聞いてみた。「原発が停止になったら、その後何十年も廃炉の仕事が待っている。現在原発で働いている人は、廃炉の仕事をやるだろう。原発停止に関する地元の反対意見はそんなにないよ」。ドイツでは電力の自由化も進み、電力会社自身もエネルギーの多様化を進めている。エネルギーを取り巻く時代

の変化を、普通のこととして受け止めている印象だった。

村のエネルギーを村へ

バイエルン州では、レーン・グラブフェルト郡を訪問し、アグロクラブト社(後述)のミヒャエル・ディースティールさんに話を聞いた。キーワードは「農業の構造改革」と「村のエネルギーを村へ」。再生可能エネルギーで地域活性化を





ドイツの農村は塊村と呼ばれ、集落が密集して一塊になっている。そこへ効率よく熱供給され、活用されている。



り、周りの住民のやつかみが起こることが問題になった。そこで、非農家でも自由に出資ができるバイオガス発電廃熱利用や太陽光発電に、協同組合方式を活用することで、住民同士の協同精神を阻害させない形をつくった。このことは村で何かをするときには重要なポイントであるという。2011年には、グロスバードルフの協同組合の投資額は合計で1503万ユーロ(約21億4200万円)に達し、村民950人の村にとって大きな額となっている。電力生産は760万kWh。さらに、バイオガス発電事業に参画している農家は、配当金以外にも、原料の有償買取があり、バイオガスからもたら

される液肥の利用による肥料代コスト削減で、多様な利益がもたらされる結果になっている。

**バイオガス発電の現場へ**

ツアー一行は、バイオガス発電の現場を2カ所訪問させてもらった。1カ所は個別農家が実施している事例で、バストハイム村のE・レーダー農場。バイエルン州内でバイオガス発電をもとに循環型農業を実現しているバイオニアだ。うだ。有機認証を受けている豚の養豚と190haの農地で小麦、ライ麦、大麦、小麦、じゃがいも、牧草を栽培。豚の敷き藁(豆科の牧草)やサイレージ、デントコーンがバイオガスの原料となる。発電は250kWh(自家消費と売電)、熱量は260kWhで、廃熱は地域の集落の温水暖房などに活用されている。バイオガスからもたらされる消化液は畑に散布する。

ツアー参加者からは、具体的な運営を想定し、経営状況や収益性に関する質問が相次いだ。バイオガス導入経費は、集落への配管を含めて200万ユーロ(約2億8000万円)だ。バイオガスの収益性が高いのは、牧草が原料であること、

2006年にマシンネンリンクとバイエルン州農業者同盟郡支部が50%ずつ出資して設立した有会社で、再生可能エネルギー分野において、プロジェクトの構想、提案、事業を具体化させるのが仕事である。具体的にはアグロクラフト社のもとで結成されたエネルギー協同組合などの経営コンサルタントをしている。目的は、再生可能エネルギーで地域おこしをすること、地域の潜在能力を高めたくさんの人が参画できる事業を構築し、村の中から自発的な発展と自己決定を促すことだ。この基盤には、F・W・ライプハイゼンが説いた「一人は万人のために、万人は一人のために」というキリスト教の精神と、ドイツ協同組合運動の原点ともいえるライプハイゼンが立ち上げた農村信用組合のスローガン「村のお金を村に」がある。つまり、住民の出資により、再生可能エネルギーを協同で立ち上げ、その収益の分配を住民が受け取る仕組みをつくるのだ。

現在アグロクラフト社は、太陽光発電を2社、熱供給を3社、F・W・ライプハイゼン・エネルギー



巨大なバイオガス発電施設を見学。

故障が少ないこと、そして温水供給(地域暖房)でも収益があることだと聞く。日本ではこの規模と予算で実現するのは難しいだろう。

もう1カ所の訪問先は2007年に設置されたアグロクラフト社が運営するウンズレーベン村のバイオガス発電施設。46農家が出資・参加している。レーダー農場とは違い、かなり大規模な施設で、発電は625kWh、熱量は700kWh。2011年には1200万ユーロ(約16億8000万円)をかけてメタンガス浄化施設も設置され、純化された100%メタンを都市ガスに販売しているそうだ。廃熱は、木材チップの暖房施設へ送ら

最後に訪問したのは、バーデン・ヴュルテンベルク州シュベールピツシ・ハルの養豚生産者グループだ。ここでも「地域と農業の潜在力を生かす」という話を聞いた。価値を高めることにより、その利益を農家に還元することがグループ結成の目的であった。小規模経営を生かし、品質保持と付加価値を高め、生産者と消費者の距離を近くする直売により農家の取り分を上げていく。もともとこの地域にはチンダアという地豚がいたが、1960年代に始まった農業の工業化で消えてしまい、成長が早く油のつた豚に取って代わられた。生物多様性の消失も危惧されるなか、シュベールピツシ・ハル農民生産

**地豚を復活させたシュベールピツシ・ハル農民生産者共同体**

れ、集落内の公共施設へ温水暖房が供給されている。この施設は巨大で、参加者たちはその規模に圧倒されていた。原料として投入されるサイレージを見た肉牛生産者であるツアー参加者からは「こんだけの量があったら、牛に食べさせたい」という声も聞かれた。



**ライプハイゼンとエネルギー協同組合**

アグロクラフト社は、

2006年にマシンネンリンクとバイエルン州農業者同盟郡支部が50%ずつ出資して設立した有会社で、再生可能エネルギー分野において、プロジェクトの構想、提案、事業を具体化させるのが仕事である。具体的にはアグロクラフト社のもとで結成されたエネルギー協同組合などの経営コンサルタントをしている。目的は、再生可能エネルギーで地域おこしをすること、地域の潜在能力を高めたくさんの人が参画できる事業を構築し、村の中から自発的な発展と自己決定を促すことだ。この基盤には、F・W・ライプハイゼンが説いた「一人は万人のために、万人は一人のために」というキリスト教の精神と、ドイツ協同組合運動の原点ともいえるライプハイゼンが立ち上げた農村信用組合のスローガン「村のお金を村に」がある。つまり、住民の出資により、再生可能エネルギーを協同で立ち上げ、その収益の分配を住民が受け取る仕組みをつくるのだ。

現在アグロクラフト社は、太陽光発電を2社、熱供給を3社、F・W・ライプハイゼン・エネルギー

を進める。

レーン・グラプフェルト郡は、穀物栽培と畜産の複合農業地帯で、小規模経営の多い地域。19世紀に入ると、近郊都市で工業化が始まり、多くの人が工場などに働きに出て離農した。その影響で農家の数も減り、貸し出された土地を残った農家が借り受けて50〜100haの規模で営農している。

そもそもこの周辺の土地は肥沃度が低く、農地としてはあまり条件のよくない場所だったが、2000年に施行された再生可能エネルギー法により固定買い取り制度が導入されたことで、大企業や外国のコンサルタント会社による風車や太陽光パネル設置のための土地購入合戦がおきた。このとき住民たちは、農村が食料だけではなく、エネルギー生産においても潜在力があることに気づかされたという。一方、再生可能エネルギーのひとつ、バイオガス発電が盛んになると、その原料となるデントコーンの過剰作付けにより、輪作体系が崩れ、小作料も高騰し、地権者へ富が集中してしまった。そのときに、エネルギー用の土地を誰がどのように生かすのかということが議論の争点になった。

もう一点、ディースティルさんがあげたエネルギー転換の必要性の背景には、核燃料、化石燃料により引き起こされる干ばつや環境問題がある。農村の潜在力である風力、太陽光、畜産、森林バイオマスを代替として活用し、その問題を解決すると同時に、古いエネルギーを持つ中央集中型から、農村を中心とする地方分散型に変えていくことが重要ということだ。

2006年にマシンネンリンクとバイエルン州農業者同盟郡支部が50%ずつ出資して設立した有会社で、再生可能エネルギー分野において、プロジェクトの構想、提案、事業を具体化させるのが仕事である。具体的にはアグロクラフト社のもとで結成されたエネルギー協同組合などの経営コンサルタントをしている。目的は、再生可能エネルギーで地域おこしをすること、地域の潜在能力を高めたくさんの人が参画できる事業を構築し、村の中から自発的な発展と自己決定を促すことだ。この基盤には、F・W・ライプハイゼンが説いた「一人は万人のために、万人は一人のために」というキリスト教の精神と、ドイツ協同組合運動の原点ともいえるライプハイゼンが立ち上げた農村信用組合のスローガン「村のお金を村に」がある。つまり、住民の出資により、再生可能エネルギーを協同で立ち上げ、その収益の分配を住民が受け取る仕組みをつくるのだ。

現在アグロクラフト社は、太陽光発電を2社、熱供給を3社、F・W・ライプハイゼン・エネルギー

協同組合23組合を支援している。事例として紹介されたグロスバードルフでは、村民太陽光発電を村民の投資と地域の信用組合からの借り入れで事業化している。また、F・W・ライプハイゼン・エネルギー・グロスバードルフ協同組合として、村営のサッカー場や倉庫、バイオガス発電施設の屋根に設置した太陽光発電事業、バイオガス発電事業、発電時の廃熱を活用した地域暖房システムが運営されている。

グロスバードルフには、協同組合ではなく、有限会社によるバイオガス発電事業もある。しかし、これは、出資者がバイオガスの原料を供給できる農民に限られるため、確実に配られる配当金をめぐ



アグロクラフト社のディースティルさん。



グントレミンゲン原発の前で、ツアー参加者たちと。後列左から4番目が筆者。



感触です！  
放射能汚染地の野菜や米から放射能は99%検出されませんが(きのこ類はまだ厳しいです。大豆も若干検出されます)それでも手放して送り届けるまでに時間がかかることは、はっきりしています。また消費者にとつても、特に小さなお子さんをもつ方にとつては手が出ないのは当然の心理です。ですから、私たちにとつてもお客さんにとつても、お互いをつなぐものが必要ですよ。それが何なのか、具体策が決まったわけではありませんが、「具体策実現の仕方のヒント」のような

ものが今回のツアーで植えつけられました。  
ヒントとは建築に例えれば次のようなものです。団体を立ち上げ、揺るがない設計思想を構築すること(建築で言えば柱、骨格、デザイン。小さなプロジェクトをまず成功させること(はじめは小さな小屋で練習。できるだけ多くの人とその利益と喜びを分かち合うこと(建物を建てた人も住まう人も利益、喜びを得ること)。得られたノウハウで地域を豊かにすること。  
ローテク・ミドルテクの見直し

さて、食べものの生産販売のノウハウはある程度ありますが、エネルギーの生産販売のノウハウはまったくありません。しかし、考えてみれば薪ストーブもエネルギー、なたね油もエネルギーになります。身近なローテクも器械の進化により利用が身近になっていきます。なにも超効率でなくともよい。中・高効率であれば地方にその技術拠点を置くので良いのです。これはAPLAの支援でネグロ

ツアーに参加した際に学んだ地域における適正技術です。  
たとえば国内視察で見た薪ボイラーは効率もよく、炊き口が広くて使い勝手がよい。高齢者の仕事にもなる。火を扱う機会の少ない子どもにもいい影響を与える。価格も灯油ボイラーとさほど変わらない。また、太陽熱温水器も非常に効率が良いことがわかっていきます。日本のエネルギー政策は熱利用の視点が欠けているという専門家も多々あります。  
技術開発・金融を地域のために

外に頼っていた資源やその利用の仕方、それを立ち上げることに必要な金融まで、効率化の名のもとに地方から中央や世界に明け渡してしまつたことを、地域に据えることはできないだろうか。そうすれば失われた様々なことを回復していくきっかけになることをドイツの地方で垣間見た気がしました。  
日本でも地域金融や地域分散という形で全国各地で見直しをはじまつており、それらが統合効率化でなく、お互いに独立し高め合う

ことでつながりができうる気がします。

### エネルギーヴェンデの成功

原発による集約電源開発の問題点に気づいたドイツは3・11をきっかけとして転換を始めた。ツアー資料の中に雑誌『世界』2014年2月号の記事「ポスト原子力時代へ進むドイツ新政権」がありました。現連立政権の連立協定書エネルギー政策一章の見出しは「エネルギー転換を成功に導く」であつて、転換Wende(ヴェンデ)は変革や革命を意味するようです。翻つて私たち日本のエネルギー政策はどうでしょうか。原発はベースロード電源として「使い続ける・新增設も辞さない」という重要な位置づけです。ドイツとは異なり変わろうとする意思は弱いように思われます。

私たちは変わりたい。少しずつでも。小さな範囲からでもエネルギーヴェンデを成功に導く。近日中には、エネルギーに関する事業体を発足し、また一歩前進します。成功への道もきつと用意されています。皆さんと共に学び、つながりが広がることを願っています。■

※写真の一部は、協同総合研究所・菅剛文さんからご提供いただきました。

者共同体は、地豚を復活させ、育種から屠殺、加工、販売を自分たちで運営し、有機認証団体も設立した。さらには、ソーセージの製造に使用するスパイスも、インドの小規模生産者からフェアトレードで調達している。86年のグループ結成から参加メンバーは年々増えて、現在は1450人。そのうち460人が有機生産者であるが、そのほかの生産者も遺伝子組み換えの餌と成長促進剤は使用しないという基準を守っているという。直売所で買えるものを見たが、ちょっとした高級スーパーのように、商品の見せ方やパッケージなど、付加価値を高めるためにかなり戦略的に考えている様子が伺えた。直売所にはレストランも併設され、肉料理などが食べられる。平日の昼間に関わらず、多くの人でぎわつていた。

### 地域がもつ潜在力で農業をかえる

滞在日数5日の短い旅であつたが、ドイツの農村現場から見えたのは、近代化の流れで農村の力が衰退するなか、再生可能エネルギーと協同を軸に、地域や農が持つ潜在力を高め、現存する農業の



シュペービッシ・ハル農民生産共同体の直売所。肉加工品も品ぞろえが豊富。

## 農家が創り出す自然エネルギー——新たな地域おこしが見えてきた

近藤 恵 / こんどう けい  
二本松有機農業研究会

私ども二本松有機農業研究会は、1978年より有機農業を続けてきたが、2011年の原発事故で存在の根幹を揺るがす大きな痛手を被ることになりました。事故をきっかけとしてAPLAと出会い、共に全6回の「福島百年未来塾」を開催し学びを深めてきました。また、研究会内に「エネルギー部会」を立ち上げ、取引のあつた

大地を守る会の奨励により、国内5ヶ所の再生可能エネルギー事業所を視察してきました。さらに新たに出会つた協同総合研究所のご助力により、ドイツの再生可能エネルギー事業に詳しい専門家の講演会を開催することができました。いまだ所属農家の収入が、3・11前の66%に留まつている厳しい状況のなかで、農家が関与できる

違い、ドイツの実践例をそのまま導入することはできない。しかし、仕組みや知恵を学び、自分たちの形をどうつくつていけるかを議論して始めてみるのが、未来を変えていく一歩になるだろう。■  
〔注〕農業機械利用の経営互助組織。機械作業を担う農村自助組織として出発。2008年のデータでは、全国に2560組織。会員数は19万3300経営(総農家の59%)。  
〔注2〕フリードリヒ・ウィルヘルム・ライプティツェン(1818年3月30日～1890年3月11日)。ドイツの信用協同組合の先駆者。  
〔注3〕刈り取つた作物を乳酸菌の作用で発酵させたもの。

### 実現可能なヒントをみつけた

一番の収穫は、再生可能エネルギーの取り組みが自分たちを奮い立たせること、地域が豊かになること、実現可能なことであること、など、漠然と思いついてきたことが前に推し出されてきたように思えたことです。APLAの合言葉「ポコポコ」でいうところの、小さなサンゴ礁に水が湧いてきた



# 海外からの委託業務ブームに揺れるフィリピン

堀芳枝／ほり・よしえ  
 恵泉女学園大学准教授

## 東

南アジアの経済はこれまでタイやシンガポールを始めとして順調に発展してきた。1990年代に入ってから社会主義国ベトナムや、紛争後に復興を始めたカンボジアの成長も著しく、さらに次の投資先としてビルマ(ミャンマー)が注目されている。

しかし、フィリピンはこれまで経済成長国として注目されることはなく、1970年代からは男性が、その後は女性も海外に出稼ぎをすることで国家財政と家族の暮らしを支えてきた。

マクロ経済の観点から振り返ると、フィリピンは1946年に独立した時点では、「アジアの民主主義のショーウィンドウ」と呼ばれ、いち早く工業化に着手した。しかし、1970年代に入って、マルコス独裁政権下のマルコス・ファミリーの蓄財や、クロニ(取り巻き)による独占や汚職がはびこる一方で、共産党の主導による新人民軍(NPA)や民族民主戦線(NDF)

らが農村に解放区を形成し、都市の労働者を組織化し、労働争議が活発になるなど、投資家にとって不安定な政情が続く、外国企業はNIES諸国(新興工業国)に投資の矛先を向けた。

1972年には11億5830万ドルだった対外債務残高も81年には113億420万ドルに膨れ上がり、1983年には対外債務支払い危機に陥った。その結果、2000年にいたるまで国際通貨基金(IMF)の厳しい管理の下にコンディショナリティ(経済再建のための条件)が課され、対外債務を原資とする財政融資政策の道は絶たれた。そして、この構造調整をへて財政緊縮下の低位均衡経済へと移行した。そのため、低水準の公共投資、インフラ整備の遅れ、低い粗資本形成率が続く、



建設ラッシュの「グローバルシティ」。

と建設されていた。BPOの発展はマニラの地図を新しく塗り替えている。

### 新産業を支える女性たち

インドがITソフト・ウェア・サービスに強かったのに対し、フィリピンはコール・センターが強い。その理由は、アメリカン・イントネーションの英語によるコミュニケーション能力が高く、クレームに対しても我慢強く、上手に対応できるという点にある。しかも、その能力を一握りの人だけでなく、非常に多くの人びとが持っている点にある。国家統計局(2009年7月10日)によると、2005年にBPOで働く8万1578人のうち、55.4%にあたる4万5225人は女性であった。特に女性の割合が高いのが医療カルテ作成の従事者で74.5%、データ加工の65.2%、コール・センターの58.8%である。アニメーションフィルムをつくるBPOは4人のうち3人が男性で逆転しているが、「移住労働の女性化」に続き、新しい経済成長の分野でも活躍しているのは女性であるといえる。初任給は2万ペソ

(1ペソ≒約2.4円)からスタートし、半年の契約期間を経て本採用となる。マニラの最低賃金1日466ペソ、月20日勤務で月収約9320ペソと考えると、BPOは就職先としては厚待遇で、新中間層として消費の経済効果も期待されている。

筆者は、米国系BPO企業を訪問することができた。そこでの仕事は、米国内にいる医者が英語で話した患者の体調を聞き取り、すぐにカルテとしてパソコンに情報入力する。約120人の女性たちが米国の時差に合わせて働いていた。また、保険の資料を作成する部門にも約40人の女性たちが働いていた。彼女たちに給与は満足かどうか聞いたところ、非常に満足している意味を込めて「Sapat(満足)」と元気に答えてくれた。インタビュにに応じてくれた3人のうち、2人がシングルマザーで「夫をキックアウトしたのよ」と笑いながら答えてくれたことから、いかに給与が十分であるかが理解できた。

しかし、これを手放して喜べないのが労働環境である。24時間対応のため交代制での労働のため、夜間に帰宅する際には危険が伴う。インタビュした一人の女性も夜中の帰宅時に強盗にあった経験があると言っていた。また、クレーターの効いた小さなブー

結果、低い成長率、弱い雇用創出、慢性的格差を生み出した。現在でも、国民約9000万人のうち年間約900万人が海外に出稼ぎに行くという「出稼ぎ大国フィリピン」が誕生したのだ。1980年代後半、プラザ合意による円高を契機に、東南アジアは日本からの投資ブームに沸きあがったが、三井物産の若王子支店長誘拐事件やクーデター未遂事件などの政治不安の中で、景気ブームはフィリピンの上を通り過ぎてしまった。

### ビル建設ラッシュで変貌するマニラ

ところが、2000年代に入るとフィリピンでは英語圏向けのコール・センターや、ビジネス・プロセス・アウトソーシング(BPO)産業が大きく成長し、2011年には64万人を超える雇用と、売上高110億ドルを超える大産業となった。2012年には、GDP成長率6.6%と目標を上回る成長を達成したほか、フィリピン証券取引所の株価指数も1年間で33%上昇するなど好調である。2013年のフィリピンのGDP成長率見通しは、IMFが6.0%、アジア開発銀行(ADB)が5.0%と発表している。



コールセンターで働くフィリピン女性。

中での顧客対応が続くと、いくら明るいフィリピン女性といえどもストレスが大きく、体調を崩す者もいるという。また、今後BPO企業は、フィリピンよりも人件費が安くインフラが整備された国に移転しないとも限らない。出稼ぎに行かなくてもよい経済、安心して安定して働ける雇用の実現はいつやってくるのだろうか。いや、この問題はフィリピンだけではない。新自由主義は労働の規制緩和、すなわち人件費の削減が核心であると考える筆者からすると、フィリピンも人件費の高騰による企業移転の日が必ず訪れると推察される。フィリピンも日本も定年まで安心して持続可能に働ける職場を追求するというのが、共通の課題であるような気がした。

〔注〕BPOとは自社の業務プロセスの一部を継続的に外部の専門企業に委託することを、ハリーナ20号「フィリピンの経済成長、その光と陰」を参照



BPAP社を訪問。左から2人目が筆者。



03

photo essay  
from Thailand

# 微笑みの国から No.6

平河夏 / ひらかわ・なつ  
一児の母、タイ・バンコク駐在3年目

## 微笑みを求めて

早いものでこの連載が始まって1年以上が経過し、私のタイでの暮らしも丸3年たった。2011年秋には大洪水、2013年末からは政情不安が今に至るまで続いている。

天災であれ人災であれ、有事に対するタイの人びとの反応は理解不能な場合が多い。そう思うのはあくまで日本人の物差しであって、これが正義だ、常識だと主張するのはナンセンスだろう。ああ、海外に間借りするとはこういうことかと、幸か不幸か傍観者でいられる身をこれまた他人事のように見ている自分がある。

それにしてもタイの人びとは鷹揚だと思う。かなり近い距離で何かが起こっていても自分のペースは崩さない。トゥクトゥクで仕入れに行き、屋台を開けて、仕事して食べて喋って一日を終える。この鷹揚さが彼らの微笑みの根源なのだろうと今は結論付けている。

様々な「タイの顔」を見たと思う。将来、日本に戻っても



バンコクの街を望む

私はまたこの国に来たいと思うだろう。その時は旅行者として、逆にもっと行動範囲が広がるかもしれない。そんなことを夢想しつつ、また宙ぶらりんなバンコクでの日常に戻っていく。

01



# kakaokita

カカオ キタ  
カカオ民衆交易奮闘記

6

津留歴史 / つる・あきこ  
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員



アビゲイルさんと娘。2014年秋冬シーズン発売中の「チョコラテパプア・オーレ」を手に!

「アビゲイルさんにはひとつの目標があります。それは5年後の村長選に立候補することです。そのため、小学校しか出ていない彼女は、中学と高校の卒業資格を短期間で取るコースに編入を希望しています。「女性が指導者になればコミュニティに変化をもたらすことができる」と力強く語るアビゲイルさん。女性に対する威圧的雰囲気は萎縮することなく、その壁を自力で打ち破ろうとする彼女の勇気と行動力に脱帽です。カカオ事業も未来の暮らしを切り開こうとする女性の志に連帯する視点をしっかり持ちながら進めていかねければ、と今シーズンの買付けが始まる今、意を新たにしました。

## 女が輝く、社会が変わる

今回も前号に引き続き、ヤニム村のアビゲイルさんの話題です。2014年2月上旬、私はヤニム村を訪れました。その時に村で話題になっていたのは、ジャヤプラ県政府がパプア先住民族の慣習法(アタット)を村の行政に組み込むようとしていたことでした。男たちはこの構想に大賛成。村の取決めのあらゆることがこのアタット機関で決定されることになるのです。インドネシアの統治に抵抗するパプア先住民族はこのアタットの復活を先住民族の権利回復と同一視する向きが多いのです。しかし、アタットは男性優位の慣習で一般的に女性には意思決定プロセスに参加できません。アビゲイルさんも生活実感のなからアタットについて手厳しい批判を展開していま

04

アジア現代文学 Asian Contemporary Literature ARE-KORE | 06

## 『東北タイの子』

カムブーン・ブンタヴィー(著)、星野龍夫(訳)、井村文化事業社(刊)、勁草書房(発売)、1980年

大野和興 / おおの・かずおき  
農業ジャーナリスト



この本を手にとったのは1989年だから、あれからもう四半世紀もたったのか。そう思うとなんだか感慨深いものがある。ほくが初めてタイのむら歩きに出かけた年だ。「タイに行くよ」と今本誌編集長をしている大橋成子さんに話したら「いい本があるよ」と教えてくれた。タイの中でも最も貧しい農村地帯といわれる東北タイの村の日々を子どもの目を通して描いた本書は、タイばかりでなくアジアを徹底する深くて広い世界を読む者に教えてくれる。翻訳者の星野龍夫の解説によると、本書は1975年に文芸誌に連載され、好評をよんだ。この年の4月、タイの社会にも大きな影響を与えたベトナム戦争がサイゴン陥落とともに終わり、「戦場から市場へ」とタイが経済成長への軌跡に入る前後の時代であった。タイの劇的な変化が始まる。農村部でも、都会への出稼ぎ、輸出入作物の導入と伝統的な

農業と農村が大きく変わりはじめた。東北タイの村で生まれた著者カムブーン・ブンタヴィーは、そうした時代の転換点のなかで、懐かしさをこめて古き村の家族と暮らしを描いた。それは決して天国ではない。長く続く干ばつに追われて、牛車に家財を積み込み、新天地を求めて村後にする家族を描いた下りは、砂嵐とトラクターと銀行に追われてオクラホマの村を棄てる農民群像を描いたスタインベックの『怒りの葡萄』を思わせる。田んぼや畑でとれるものだけでは家族が食べるのに十分ではなく、一日の大半は食べもの探しに費やされる。それは主に子どもの仕事だった。鳥、魚、蛇、蛙、ネズミ、木の葉や草、何でも食べる。それぞれ代々伝わる獲り方や食べ方があり、それは文化といつていいほど洗練されている。このあたりは、アジア太平洋戦争の只中に四国山地の奥深い村で育ったばかりの子ども時代と重なりあう。成田国際空港に反対して農地を守るために闘った三里塚の百姓青年たちももう60代半ばとなったが、この開拓農民の息子たちの幼き日々も似たものだった。道々蛙をとり、皮をむいて火にあぶって腹を満たせた。アジアだなあ、とつくづく思う。

## 子どもの目を通って感じる古き時代

02

## マイストーリー ジャパン

日本に住む在日外国人たち 【第十二回】



アンジェロさんのお店「パッポアンジェロ」にて。

合気道をやっていたことがきっかけで、26年前、20歳の時に日本へ来たアンジェロさん。子どもの頃からマンマ(母親)の手伝いをしていたため、料理が得意だった彼は、日本で料理人をしてきたお兄さんの店を手伝い始め、13年前から東京・自由が丘でピッツェリア・リストランテを営む。産地に趣き、生産者に直接会い、全国各地のこだわり食材を使っているお店だ。こだわっている理由は、日本の食料自給率の低さにあった。米をつくる文化があるのになぜ外国産に頼っているのかと情けなく思い、日本人はものを作るのが下手なのだろうか疑問に感じたそう。その疑問を解消すべく、実際に自分の目で確かめたいと全国の農家や牧場を歩き周った。そうして見えてきたのは、「やるじゃないか! 日本はいいもの作ってるじゃないか!」という答えだった。そして、「こんな

## イタリア「コッシオリノ・アンジエロさん」

聞き手: 大久保みづみ (A・L・A 編集部)

なに美味しいもの作っているのになんでだよ!」と頭にきたそう。せめて自分の店では、国産自給率を上げたいと今に至る。以前起こったレストランの食品偽装問題には同業者として怒りを感じたが、だからこそ確かなものを出す店にはチャンスなのだと話してくれた。来日した当時と今の日本の変化を尋ねると、安い飲食店が増えて大事な日本の食文化が薄れているように感じるといふ。そして、アンジェロさんはただの料理人ではない。活動の幅は店外にも及ぶ。ボランティアで小学校や山梨キララの学校で子どもたちを対象に料理教室をしている。教える前後では子どもたちの目が変わるといふ。近所の小学校へ半年かけて教えに行った時は、問題が多く荒れていたクラスの児童たちがまるつきり変わったこともあった。3・11の震災後からは、定期的に宮城県石巻市へ炊き出しにも行っている。イタリアでは小さい時からボランティアをするのは普通感覚だったそう。やりたいことがたくさんありすぎて身体がひとつじゃ足りない日々を送っている。料理の原点を教わった祖国のマンマと日本のことを誰よりも愛する料理人である。



# APLA 食堂

Kitchen APLA

04

今日のレシビ

## 茶葉をまるごと使った簡単レシピ

レポーター

赤石優衣 / あかいし・ゆい  
大久保ふみ / おおくほ・ふみ  
APLA事務局  
廣瀬康代 / ひろせ・やすよ  
APLA理事

## 緑茶と紅茶は、飲む以外にも美味しくいただけます。

### アールグレイのシフォンケーキ

アールグレイの味・香りを存分に堪能できるシフォンケーキです。

【材料】(直径17cmのシフォンケーキ型1台分)

<p>〈卵生地〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 薄力粉..... 80g</li> <li>● 砂糖..... 30g</li> <li>● 卵黄..... 4個分</li> <li>● 菜種油..... 大さじ2</li> <li>● アールグレイの茶葉..... 大さじ1 (細かくしておく)</li> </ul> <p>※お好みでスライスアーモンド</p>	<p>〈メレンゲ用〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 卵白..... 4個分</li> <li>● 砂糖..... 40g</li> </ul> <p>〈豆乳紅茶〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 茶葉..... 大さじ1</li> <li>● 熱湯..... 50ml</li> <li>● 豆乳..... 50ml</li> </ul>
---	--

【作り方】

1. 小鍋に湯を沸かし、茶葉を加える。茶葉がしっとりしたら豆乳を加え、弱火で沸騰するまで温め、濾して50ml分取り分ける。
2. ボールに卵黄・砂糖(卵生地分)・細かくした茶葉を入れ、泡だて器ですり混ぜ、菜種油・1を順に加え、そのつとよく混ぜる。薄力粉をふるい入れよく混ぜる。
3. 別のボールで卵白を泡立て器で泡立て、ふんわりしてきたら砂糖(メレンゲ分)を3回に分けて加え、しっかり泡立てる。
4. 2に3を少し加えて混ぜ、これを3のボールに一気に流し入れる。ゴムベラで白い筋がなくなるまで手早く混ぜる。
5. お好みで型の底にスライスアーモンドを散らし、生地を一気に流し入れてから、型ごとトントンと落として気泡を抜き、170°Cのオーブンで30分焼く。焼きあがったらすぐに逆さにして冷ます。

### 緑茶のフォッカッチャ

茶葉を入れることで、見た目も鮮やかに。30分もあれば作ることができる、お手軽フォッカッチャです。

【材料】

<p>〈A〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 強力粉..... 100g</li> <li>● 薄力粉..... 100g</li> <li>● ベーキングパウダー..... 小さじ2</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 塩..... 小さじ1</li> <li>● 茶葉..... 小さじ1</li> </ul>
--	---

- オリーブオイル..... 大さじ3~4
- 牛乳..... 50cc

※薄力粉を使わず、強力粉200gでも作ることができます。その際、牛乳ではなく水(同量)を使用してください。更にもっちりとした食感になります。

【作り方】

1. Aの材料をすべて混ぜる。
2. オリーブオイルと牛乳を入れて、よく捏ねる。
3. 生地をめん棒で平らに伸ばし、表面にオリーブオイル(分量外)を塗る。
4. オーブンで15分ほど焼く。



←アールグレイのシフォンケーキ  
↓緑茶のフォッカッチャ

### 今回の雑学

今回は、紅茶の味を最大限に味わっていただくため、ティーバッグではなくリーフタイプ(大きい茶葉)とブロークンタイプ(細かい茶葉)を使用した美味しい飲み方をご紹介します。

#### (1) 茶葉を量る。

ティースプーン1杯3g(ティーカップ1杯分)

#### (2) ポットを湯通しして温めておく。

- ① 美味しい紅茶を淹れるには、お湯の温度管理がとても重要な要素に。ポットを湯通しするひと手間がなければ、紅茶が本来もっている美味しさを引き出すことができません。
- ② ポットの容器も重要です。保温性や使いやすさを考えると、形状は丸みのある陶磁器がおすすめです。

#### (3) 沸かしたてのお湯を使う。

ティースプーン1杯3gに対して約200ccのお湯

- ③ 紅茶は緑茶と違い、濃く淹れてしまっても、そのあとお湯を足して薄めることができます。お客様に紅茶をもてなす際、少し濃めに抽出させ、一緒にホットウォータージャグ(差し湯)を出してあげるといいですね。
- ④ 茶葉をポットに入れ、お湯を入れると、お湯の中で茶葉が舞うようなジャンピングという現象が起こります。沸騰していないお湯だと茶葉は上に、煮詰めすぎたお湯だと茶葉は下へ沈みます。

#### (4) しっかり抽出時間を取る。

リーフタイプ:3分以上、ブロークンタイプ:2分半~3分

APLAで取り扱っているリタレーディングの紅茶は、スリランカ産。農業、化学肥料に頼らない農法。作り手の健康にも優しく、土壌の環境保全にもつながります。茶葉は果物や野菜と違って水洗いできない分、できるだけ農薬を使用していない安心できるものがおすすめです。

## 撮っておきアジア

Totteoki ASIA

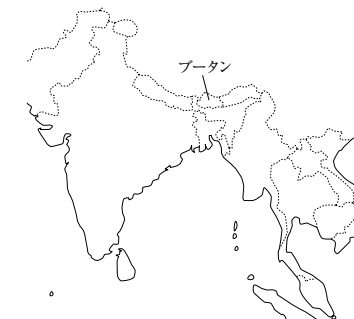
24

撮影者○近藤康男 / こんどう・やすお  
撮影場所○ブータン



- 1 — ブータンは九州ほどの国土に約70万人が住む自給農業の小国。子どもから老人まで、伝統と自然と宗教の中で生きている。通学する子どもたちも伝統的な民族衣装をまとっている。
- 2 — モンガルの渓谷と棚田。ブータンの農村は海拔3000メートル以上の高さまで広がる。美しい棚田があれば、数百メートル下の渓谷につながる転げ落ちそうな急斜面にへばりついている険しい田畑も多い。
- 3 — 中部に位置するジャッカルのホテルでの、そばクレープ、松茸スープ、チーズ、紅茶の朝食。松茸は豊富で安い。
- 4 — 空の玄関パロで弓矢の競技に遭遇。最も人気のあるスポーツで、女性群が輪になって歌を歌い踊って応援する。
- 5 — トンサ・ゾン。ゾンは各地方の行政・司法・宗教を司る機関で、それぞれ、広い中庭で区切られて分かれている。ブータン独特の統治システムだ。多くは山の腹にあり城塞も兼ねている。
- 6 — タシガンの風景。典型的な地方の中心都市だが本当にこじんまりとした街である。

(2014年3月撮影)



『撮っておきアジア』は今号で最後となります。次号より新しい連載企画が始まります。ご期待ください。



編集後記

今号をもって、『撮っておきアジア』、『マイ・ストーリー in ジャパン』、『アジア現代文学』そして『微笑みの国から』の連載が終了します。これまで多くの皆様に多彩な情報を紹介して頂いたこと、心から感謝します。コラムでは、タイ在住の平河夏さん、いつも素敵な写真ありがとうございます。これから正念場を迎えるカカオプロジェクト担当の津留麻子さんはバプアに在住し、今後も現地の人びとの奮闘を継続して報告して下さいます。次号からスタートする新しい連載記事、どうぞご期待ください。(大橋)

ここ数年、ネグロス島に足を運ぶたび、州都バコロドやその周辺の町が発展し、景色が塗り替えられていくことを実感する。人びとの持ちものや雰囲気も変わってきているところがあると思う。これだけ世界が変わり速いスピードで変わっていくことを、一方で否定できないと思いつつも、守っていたいもの、大切にしたいことがある。いくつもの原稿から、そんなことを改めて感じた今号でした。(吉澤)

3月、二本松を久々に訪問しました。震災後、色々な交流や学びの場を経て、試行錯誤を繰り返しながら、前を向いて動き出している二本松有機農業研究会のみなさんの話を聞きながら、地域の中に生まれた動きを応援する“ヨソ者”としてのAPLAの役割を再確認。事業担当として2010年以降に通っている東ティモールでも、コーヒー生産者の主体的な動きが生まれつつあり、同じようなことを感じています。(野川)

ハリナ HALINA

2014年5月号 vol.02-no.24  
2014年5月1日発行

【編集長】  
大橋成子

【編集者】  
吉澤真満子、野川未央

【表紙写真】  
長倉徳生

【デザイン・制作】  
十年舎

【編集・発行】  
特定非営利活動法人 APLA  
(APLA/あぷら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)  
〒169-0072  
東京都新宿区大久保2-4-15  
サンライズ新宿3F  
tel. 03-5273-8160  
fax. 03-5273-8667  
e-mail info@apla.jp  
URL http://www.apla.jp

【印刷】  
株式会社セイズ

事務局の動き (2014年2月～4月)	
2月 1日	山形県白鷹町で遺伝子組み換え学習会と「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
2月 2日	山形県米沢市で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
2月 2日～8日	「ドイツのエネルギー転換と有機農業」スタディツアーに吉澤が同行しました。
2月 3日	パルシステム埼玉平和募金贈呈式に野川が参加しました。
2月 4日	学芸大学付属高校の校外授業で野川がAPLAの活動についての話をしました。
2月 6日	「もうひとつのチョコレート展2014@cafe slow」開催。催し中に「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました(2月6日)。
2月 14日	JIM-NET主催「絆ぐるぐる展」にスピーカーとして吉澤が参加しました。
2月 21日	BMW技術協会・若手幹事に吉澤が参加しました。
2月 23日	東京朝市アースティマーケットに出店しました。
2月 25日～3月 8日	東ティモールへ野川が出張しました。
3月 7日	新潟総合生協・ヨランダ台風支援金贈呈式と生産者総会に吉澤が出席しました。
3月 10日	二本松有機農業研究会自然エネルギー部主催の地域エネルギー現地視察会第5回(埼玉県小川町のバイオマス発電ほか)に秋山が参加しました。
3月 14日	アジア互惠のための民衆基金(APF)理事会に秋山が出席しました。
3月 16日	ATJと共催で、セミナー『「バナナと日本人」のその後—私たちはいかにバナナと向き合うのか?』を開催しました。
3月 21日	二本松有機農業研究会「日独再生可能エネルギー懇談会」に疋田、吉澤、野川が参加しました。
3月 25日～26日	フェアトレード国際シンポジウム2014に出店しました。
3月 29日～30日	開発教育協会主催「教材体験フェスタ2014」に出店しました。
4月 1日	第24回BMW技術全国交流会・第4回アジアBM連帯実行委員会と、第8回BMW技術基礎セミナーに吉澤が参加しました。
4月 4日	滝桜花見まつり実行委員会主催「日本の農家が生き残るための三春「パーチャン戦略特区計画」に向けて勉強会～福島三春の取組から」に参加しました。
4月 10日～11日	アユス仏教国際協力ネットワークの春合宿に野川が参加しました。
4月 19日、20日	アースティ東京2014に企画参加、ブース出店しました。
4月 20日	三春花見まつりに吉澤が参加しました。
4月 22日	二本松有機農業研究会、アユス仏教国際ネットワークと交流会を実施しました。
4月 27日	セカンドリーグ埼玉の企画「白幡日曜塾」で吉澤がバナナをテーマに話をしました。
4月 27日	東京朝市アースティマーケットに出店しました。

事務局からお知らせ

フィリピン・ボホール地震、ヨランダ台風被災者支援へのご支援ありがとうございました。

〈支援金のご報告〉	
2014年3月末現在	38,819,596円
〈送金状況〉	
ATC(ボホール地震・バラゴンバナナ生産者への支援)	13,000,000円
ASIN(レコレトス会)	12,324,010円
<b>送金額計</b>	<b>25,324,010円</b>
※残金は、4月の送金を予定しています。次号でご報告いたします。	

フィリピン・ネグロス島にインターンを派遣します。

2014年4月よりインターンとして寺田俊さんがネグロス島のカネシゲ・ルーラルキャンパスで働き始めました。

2014年第7回総会は、5月24日(土)です。

東京都新宿区・信濃町教会で開催です。会員の方には別途ご案内をお送りしていますが、ぜひご出席ください。



買付けたオレンジをきれいに水洗いする。

その結果、メンバーからの出資金115ドルでスタートしたところから、オレンジワインの販売利益として245ドルを計上することができました。もうひとつの大きな成果が、そのお金を使ったメンバーを対象にした信用貸し。2014年のシーズンが始まる5月までの間、急

「自分たちの地域にも柑橘類がたくさんあるから、フィリピンから教わった方法でつくってみよう！」と女性メンバーによるオレンジワインづくりは、大きな成果をあげました。グループの作業は毎週土曜

From East Timor [東ティモールより]  
オレンジワインづくり  
2年目を終えて

日。コミュニティ内で買付けた柑橘類を持ち寄って、きれいに水洗いするところから作業がスタートします。電気が通っていない村なので、果汁を搾り出すのも絞り器を使って一つひとつ手作業。その果汁を鍋で煮立て、砂糖とイーストを混ぜ、ボトルに詰めて作業は完了です。ここから1カ月〜1ヵ月半発酵させます。評判を聞きつけた人たちがそのできあがりを持つウェイティングリストにずらり……という状況が11月まで続いています。

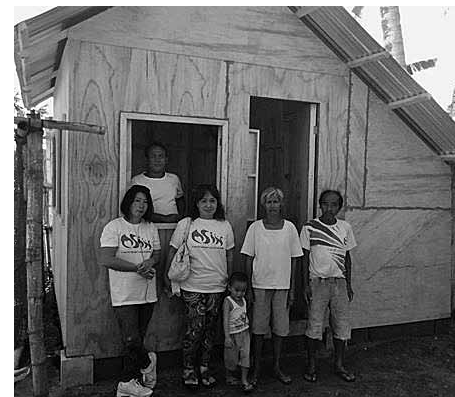
From Negros, Philippines [ネグロスより]

ヨランダ台風支援報告

2013年にフィリピンのビサヤ地方を襲った台風ヨランダ。皆さまより頂いた支援金を通じて、現地復興支援が始まっています。今回は、レコレトス会を通じて開始した支援に関する報告です。当初、レコレトス会による緊急救援活動に充てる予定でしたが、複数の団体と連携して、より地域に密着した草の根型の多様な支援ができるようにと、支援活動のネットワークASIN (Alternative Solidarity Initiative Network) が結成され、そこを通じて活動が実施されることになりました。ASINは、基本的に現場

ぎのお金が必要なメンバーに對して、グループのお金を貸し付けることを決定したので。東ティモールの村では、一般的に、お金を借りたときの利息は100%(たとえば、1000

ドル借りたら、200ドルにして返す)という決まりがあります。GATAMIRでは、メンバー全員での話し合いを経て、利息を10%に設定しました。子どもの学費や用事があって首都デイリリに出かける際の交通



ASINの支援で建てられた家屋。

調査と住民からの聞き取りを踏まえて必要な支援をすることになっています。復興支援や生計向上のための活動が中心となりますが、必要に応じて食料や医療品、物資の提供をすることもあります。現在までに、ネグロス島北部カディス市における栄養不足の子どもたちへの給食の配給、ネグロス島の北に位置するマンバカヤウ島(バンタヤン島の周辺諸島のひとつ)への支援として、医療品や太陽光パネルの提供、子どもや青年に対するトラウマ対策のためのワークショップを実施しました。ネグロス島北部E・B・マガローナ町の漁民に對する支援の要請も上がってき

ており、内容に関して審議中です。その他、全壊した家の再建や補修を支援しています。家屋の再建については、2件の家が完成し、4件が建設中です。現在は、ネグロス島北部及びマンバカヤウ島への支援が中心ですが、今後バナナ島への調査も開始し、支援を実施する予定です。(APLA事務局長・吉澤真満子)